

FADO

16

Outubro 1997

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL



月田秀子の昨日、今日、明日…

ファドは日本の演歌のようなもの？

レコーディング見聞記

9月16日、新しいアルバムの収録の初日である。午後、月田さんと池側さんと待ち合わせてスタジオへと向かう。始まる前の月田さんはやはり少々緊張した感じがかった。池側さんはこの録音のために二日ほどかけてギターを調整してきたそうだ。野上さんはこのスタジオで録音するためにいろいろと手配してくれていた。大阪梅田近くにあるこのスタジオは月田さんの最初のアルバムを録音したところだった。

小一時間くらいの打合せの後いよいよ収録が始まる。歌い始めのせいか何度かやり直しが入る。録音スタッフがマイクを調整する、伴奏の二人はチューニングをしたりと、緊張感が漂う。月田さんの歌をロズさんだりしている。やはり録音というのはいつものライブとは勝手が違うというのがよく分かる。OKは出るが、今ひとつまだ乗り切れないといった感じで、一時間ほどしたところで休憩。

ワインを買ってくる。ライブに行くとき出てくるあのポルトガルワインである。ワインは月田さんの重要なエネルギー源だ。ワインを飲んで月田さんもちよっと落ち着いた様子。じゃあもう一回行きましょう、と録音再開。

レコーディングはライブとまた違う緊張感と労力が伴う。納得がゆくまでやり直しはきくが、その分妥協は許されないからなおさらだ。緊張がワインで和らいだのか次の二曲はほんの少しだけの手直しをしただけで、OKとなる。

後半が始まる前にスタジオの中の照明を楽譜が読める程度までに落とした。歌うための演出、雰囲気作りであった。それは思った以上の大きな効果があった。それだけではなかったのだろうが、そこからは不思議なくらいうまく進むようになっていった。ほとんど一回でOKなのである。録音が始まる前に「ちょこちょこいじりながら録音するより一発録りの感じで行きましょう」と言っていた通りになってきた。

途中一曲を歌う前にライブの時のように語りを入れようという事になった。アルバムにいれるためではなくこれも雰囲気を作るためであった。それがまたよかった。月田さんの声が心地好くモニタールームのスピーカーから流れてくる。それに合わせるかのように伴奏の二人のギターものってきているのが傍から見ても分かる。もはや撮影をすることは忘れ、出来ることは、いつものライブの時のように、ただひたすら歌に聴き入る事のみであった。

録音が始まってすでに六時間が経ち、時計の針も十時を過ぎている。もう一曲だけで今日は終わりにしましょうかと、モニタールームから声が入る。最後の曲は声とギターのバランスに少々問題があったため、もう一度やり直したがこれもすぐOKとなった。録音の終わったスタジオの中の月田さんを撮影に行く。六時間という長丁場に少し疲れたかなという感じはあったが、それはこちよ疲労感であり、晴れやかさがあったのは言うまでもない。

(谷口記)

ファドを本格的に歌い出すようになって、一年に一度はリジュボアを訪れるようにしている。訪れる度に私は、幼少の頃、世話になった近所のおじさんやおばさんの顔を、ポルトガルの人達に重ねてしまう。みな貧しく、寄り添い合うようにお互いに助け合って生きていた40年ほど前の日本を思い出す。貧しさの中で人々はあんなに助け合って生きていたのに、今この豊かさの中で私たちは、人のことをおもしろ余裕もなく、何と殺伐と生きているのだろうか。そんな疑問がふと湧いてくる。

先日、某テレビ局の取材を受けた。ファドと演歌がよく似ていると言う観点から、コメントが欲しいと言う。「ファドは日本の演歌のようなものだ」と一言で片付けられてしまうことを常々遺憾に思っていた私である、共通点を探そうとすればするほど、相違点ばかりが出てくる。ファドの伴奏楽器は、ギターラと呼ばれる複弦6コース12弦のスチール弦を張ったマンドリンに似たポルトガルギターとギターである。歌、ギターの双方に、独特のこぶしが使われる。似た点と言えば、そのこぶしと、マイナーで、センチメンタルな曲調ぐらいである。そこらへんが、古賀メロディーと似ていると言えば似ている。が、しかし！ファドはファドであって、演歌ではない。決してない。

ファドには、聴衆への媚びが無い、人間の潔さがある。フランスにシャンソン、イタリアにカンツォーネ、アメリカ黒人のブルース、中南米のフォルクローレ、アルゼンチンのタンゴ等各国に民衆の熱い血の流れた歌があるのに、今の私たち日本人には、それらにあたる歌が、無い。一人一人にとって、同世代人間にとってのなつかしのメロディーがあるのは事実だ。自分の思い出を重ね聞く音楽も必要だろう。でも、生きている叫びにも似た、祈りにも似た歌は、人間として、生きていることを呼び戻してくれる。ふと、立ち止まってみたくなる。そんな時を持つことの大切さを教えてくれたのが、ファドである。

「夜更けに月田さんのファドを聴いていると、今まで出会った人、傷つけたり、裏切られたり、憎んだりした人達の事を思い出す。そしていつのまにか、すべてを許している自分に気付くんだ。冷えきっていた心がほんわり暖かくなって行くのを感じる時、生きていて良かった、と思うんだ。」自分がなぜ歌っているのか、答えとしての言葉が見つからなくて苦しんでいるときのファンの人この一言は、ずいぶん私を力づけてくれた。ファドの何たるかを、歌を聞いてくれる人に私はずいぶんと教わった。

追記

結局、9月23日TBS系列で、全国放送予定だった「上岡龍太郎のポルトガル紀行」は、関東地区のみの放送となり、しかもその中で、撮影した大阪でのライブ風景等、月田の出演は結局無かった。演歌のルーツをファドに探すのは無理だったと言う事か、ファドは、制作者の意図としては取るに足らないと言う事だったのか。いずれにしても、バラエティー番組で、へんにおもしろおかしく取り上げられるより良かったと思いつつ、全国放送という言葉に乗せられてしまった愚かさを反省したお彼岸の一日でした。楽しみにして下さった方々には遅れ馳せながらお詫び申し上げます。(月田)

ensaio

私のストック

それは、1984年11月27日の夜だった。私は初めて「シャンソン・ライブハウス」なるものでシャンソンを聞いた。歌手は男性1人、女性2人のラストステージであった。女性歌手の1人が月田秀子であった。日本人離れたマスクに、運動神経の旺盛な強じんな身体、声はハスキーで、空に向けて叫ぶような唱法、あまり上手とは思わなかったが、これまでのシャンソン歌手のイメージとはほど遠いタイプの歌手であったように思われ、何か魅せられるものを感じた。月田秀子との初めての出会いである。これより3年前、私は初めて海外旅行をし、ヨーロッパ5ヶ国を訪れ、パリやローマ、そしてロンドンの街を見聞し、モンマルトルの「ラパン・アジル」を知り、ローマの共和国広場の野外レストランでカンツォーネを聞いた。帰国後、日本にもこんなライブハウスはないものかと思っていたら、ある「飲み歩き情報誌」で、梅田に「ペコー」という店があるということを知り連れを誘って行って見た。以後14年間、「ペコー」のシャンソンと月田秀子との「近くて遠い、長くて短い(歌は3分間)」関係が続くことになって今日に至っているのである。

さてこの人間関係は、夫婦と似たようなところがあって、最初は魅力に取り憑かれ、熱くなり、その内に馴れてきて、馴れから情性が生じ、馴れ馴れしさは、特に男と女の場合、第三者から「デキテルノカ」と疑われ、時にはストーカーのような扱いを受ける。そして些細な事で対立して、心と心に軋みが出てくる。やがてお互いの「アラ」が見え始め、歌にも飽きてきて新鮮さを失ってくる。昨今では何となく「くされ縁」みたいな感じで、歌を聞くより顔を出すことに力点が移ってなんとなく変な感じ。そこで「これでは駄目だ」と思い、「縁を」切らずに、しばらく間をおいて、もう一度原点に立ち帰り、自分と相手を見つめなおして再発見に努めようと考えている次第である。「近くて遠い」歌手(スター)と客(ファン)の関係には物理的な法則が貫徹している。客(ファン)は歌手(スター)という中心点に向けて求心運動を行う。歌手(スター)は客(ファン)という多数の点に向けて離心運動を行う。その形は「未広がり」である。歌手は客に大して多方向であるから平衡感覚が要求される。であるから、その気苦労は大変だと思ふ。

さて夫婦であれば数十年もすると、その関係の良し悪しにかかわらず、共同で蓄積した何らかのストックが残る。家が建ち、家財道具や流動資産も増え、人によっては負の資産たる共同の借金がある。歌手と客との間には、そのようなものは残らない。私と月田秀子に関しては、ストックといえば、ファーストコンサートから現在まで

のコンサートプログラム、CDとテープ、そしてポスターとチラシ、一方通行の片道書簡(案内状)ぐらいなものであり、ばかばかしいと思えばそれまでだが、客によっては斯様なものはなく、ただ淡い心のストックだけである。だから私は、「まだ俺はましな方だ」と自負している次第である。私のストックは月田秀子に関したもののだけではない。ポルトガルの「ファド」に関するものもある。CD、テープ、そして「ファド」とポルトガルに関する文献等である。

この10年間にCD、テープはかなり増加した。日本盤、ポルトガル盤、フランス盤、そして中には、1891年から1967年までに出生した有名なファディスタの歌が収録されている「Biografia do Fado」(ファドの伝記)というオランダ盤もある。日本版は著名な音楽評論家の濱田滋郎氏や高場将美氏等の訳詞と解説があつたすかるのだが、外国盤はそうはいかない。先づファディスタの氏名と曲目は、自分で調べて訳さなければならない。語学に弱い私にとって至難の技である。暇を見つけて、こんなことをしているうちに肩が凝らずに、楽しくなって、感性も豊かになってくる。また月田秀子のエッセイに出てくるアマリア・ロドリゲスやカルロス・ド・カルモ等、著名なファディスタやギターリストの存在が身近に感じられる。「そんなに凝り固まって財産を減らしたのではないか？」と人に問われるが、「心配御無用。かかる道楽は心と知識が豊かになっても、本来のストックは減らない」と答えており、事実、私のストックは増えていることはあっても減ってはいない。

月田秀子のもとに集まるファンレターや「ファドジャーナル」に寄せられた寄稿文も、秀子とファンとの間に蓄積された貴重な「心のストック」である。「心のストック」は凝縮されてこそ現実のものとなり、保持されるものである。人間の記憶や思い出は、その対象が遠ざかり、消えてしまうと、薄くなり、やがて忘却の彼方へ消え去って行くものである。

月田秀子のファドは今日、「長い冬に蒔いたファドの種は、10年目の今、やっと芽吹いていこうとしている。」今後数十年、その活動が期待できると思うのだが、歌手生活にも限りがある。何十年か先、何時かは有終の美を飾って、永かった歌手生活から引退し、私達ファンの前から、その姿を消すであろう。その時こそ秀子との間に蓄積された「ストック」が、過ぎ去った栄光と感動のファドを、私達の心に蘇らせてくれるものである。そしてそこから月田秀子への「サウダーデ」が始まり、「近くて遠い」関係が「遠くて近い」関係に転化すると思うのである。

何らかの「ストック」を残しておこう！本稿の結論である。

(H・T生)

ficção

読切連載

秀子のエピソード帖 [その11]

秀子邸、七人の美女の謎

内間 天馬

ナ、ナンダ、この美女達は？何やら一心不乱に作業をしている。先日、所用があり、昨年9月に引っ越したという月田さんの新居を訪ねた。鶴橋にしては閑静な一角。ドアを開けて驚いたのは謎の美女七人。来訪者に目もくれないほど忙しそう。が、筆者は瞬時に理解した。実力、才能あれど、それだけでは食べてゆけるのは、ほんの一部だという現実美術界でも音楽界でも同じ。かつて、LP十数枚集めた憧れのジャズピアニストにニューヨークで遭遇、昼間はタクシーのバイトをしていると彼が平然といった夜の事は忘れたい。月田さんもやはり生活は楽じゃなのだな。アルバイトの女性を雇い、こうやってダイレクトメール？の内職をせざるを得ないのも、ま、仕方がないな、と納得しつつ、彼女の新居を拝見する。2DKの変形であろうか。玄関脇の下駄箱の後ろに

オルガンらしきもの、その向こうに、大型ゴミの日に拾ってきたものかかなり大きなテーブル。そこに七人の美女が脇目もふらず作業を続けている。その脇をそっとぬけ寝室を盗み見る。4畳半に簡素なベッドと筆筒。愛人と同棲という雰囲気にはほど遠いな。L字型のやたら広いベランダに酒専用の冷蔵庫とは嬉しいねえ。壁も天井も真っ白にペンキを塗ったという月田さん。さぞかしダイエットの効果があつたであろうと彼女のウェスト近辺に目をやった時、美女の一人が微笑み、やっとうご挨拶。小生、七人の侍は知っておるが、七人の美女は初めてだ。一体何をしておられるんですか？「ファド倶楽部の会報を送るんです」。エェ〜！会報はいつもこうやって？聞けば800近い会報を発送するのは七人がかりでもかなりの手間だとのこと。こんなに大変だと知らなかった。せめてお名前でも聞かせてください。五木文庫主宰、京美人田中真理子さん、色白美人の横山千鶴子さん、大柄美人の中西瞳子さん、江戸っ子美人の斎恵子さん、チャボ美人の井本良子さん、肝っ玉美人の山田蕎子さん、叶倫さんは月田さんの母替りの東北弁美人。皆さんほんまにありがとね。筆者、彼女たちのボランティア精神に涙し月田邸をあとにしたのでした。

わたしの中の、ファド、そして月田さん

月田さんとの出会い(1)

自分が、どうしようもなく落ち込んだとき、友達のありがたさを感じます。

喜びを分かち合うのは、比較的誰とでもできることだと思いますが、悲しみを分かち合うのは、ほんの一握りの友達としかできない。友達は、さりげなく私を気使い、悲しみの底から私をほんの少し引き上げてくれます(ある人にとっては、それは、恋人であり、夫や妻なのでしょうが……)。

わたしにとって、“ファド”は、そんな友達に似ています。昨年、仕事があまくいなくて、どっぷりとブルーな気分になっていたとき、ファドを聞きました。直接的に人を慰めるような歌詞でもない、また、ほとんどがポルトガル語だから意味はチンプンカンプン。でも、なぜか、私に語りかけてくれた気がしました。「元気になりなさいよ」「みんな、同じなんだよ」「一緒に乗り越えようよ」と。

それは、なぜだかわからない。でも、多分、それが歌の心。優しく、そして、強さを兼ね備えた歌に、優しく、そして強い月田さん(?)が命を吹き込むから、心に響いてくるのでしょう。

正直いって、月田さんが、こういう感じの人だとは、思っていませんでした。

月田さんとフリーライターである私のつきあいは、今年の、確か5月、さる女性雑誌で取材をしたことから始まりました。

事前に私の頭の中にインプットされていた月田さんのイメージといえば、真っ黒なストレートロングヘアに真っ黒なドレス姿で、「神秘的。ひょっとすると難しい人では?」。ファドをよく知らないこともあって、取材当日、私は、恐る恐る月田さんの部屋のドアを叩いたのです。

でも、出迎えてくれた、月田さんは、なんだか、とっても自然体。ちょっと眠たそうだったものの(後で聞くところによると、人に気を使わせるようなとってつけた愛想笑いもなく、かといって無愛想ではなく、自然な笑みに、(年下の私が失礼ながら)時には少女のような、はにかみ笑顔。取材を始めると、タバコをプカリとやりながら、無知な私の質問にも丁寧に、言葉を飾ることもなく、ときには答えを訂正しながら、静かな声で対応。“日本でただ一人のファド歌手”という気負いも感じさせない、飾り気のないその受け答えに、私は「何だか、とっても楽な人だなア〜」とホッと、後で、自然体でいられる月田さんの強さ、また、私を楽でいさせてくれた月田さんのさりげない優しさを感じたのでした。

……ほんとに、このせちがらい世の中、自然体でいるのも、まわりの人を楽でいさせるのも、簡単なことではありません……。

そして、(恥ずかしながら)その後で初めて聞いた月田さんのファド……。どこから、あんな声が出るのでしょう! CDでしたが、取材したときの穏やかな声からは想像もできない、太く、力強い声。

そして、その後、京都『巴里野郎』で初めて聞いたライブ! 人の心を吸い寄せるような情感豊かな歌いっぷり。CD製作者には申し訳ありませんが、期待を遥かに越えた月田さんの生の声に、私は、感激したのでした。

OLから、舞台女優、シャンソン歌手を経て、今の自分を築かれた月田さん。ある人からは、若いころは学生運動の闘士だったとも聞きました。

そんな月田さんがおっしゃったことは、「失ったものに対する想い、叶えられなかった夢、人生に対する悶々とした想い……。ほら、あるじゃない? 失ってしまったけどアレはとても大切なものだったなっても。わたしのファドを聞いて、そういうものを思い出すしてほしい」

そういうものを思い出すことは、正直言って辛いことです。でも、月田さんのファドを聞いて、なぜか、励まされ、希望が湧いて来ることを思うと、それは、やっぱり、人間にとって必要なことなのかも知れません。

再度、一人で、巴里野郎を訪ねたとき、月田さんは言いました。「サンケイホール、来てくれた?」。私が「小さなライブハウスが好きだから行かなかった」と答えると、「また、大きな舞台ならでのおもしろさがあったのに…」とちよつとがっかりされた様子。

今年、また今までとは違うライブを楽しみに、是非足を運びたいと思っています。

中谷京子

FADO増刊号を2度3度繰返し読ませていただき、秀子さんの声でNHKで語られている様が浮かんで来ました。編集後記に御感想をと書かれていますので幾十年振りかで原稿用紙を出し筆を取りました。去る7月8日ポルトガル協会主催のポルトガル語会話講座終了式が新阪急ホテル地下の「リード」で催され、お隣が今年の一月、秀子さんと御一緒にリスボンへ行かれた中西御夫妻だったのですが、その際ファドジャーナル14号にそのくだりを投稿したと伺い、帰宅して早速、氏の「近くて遠い関係」のエッセーを楽しく読ませていただきました。「貴方も投書は大歓迎だから書きなさいよ」と奥様から云われ昔々大昔、関学新聞部の記者をやっていたのを取も外聞もなく、晒そうと思った次第です。秀子さんとのそもそもの出会いはこの新聞部の部長の目次敬一さんです。この先輩が私をつれて山中酒店のお向かいのホールへ出かけたのは1988年か89年の事でした。

そこで彼女の今は今も一緒、長い黒髪と黒の衣装、語りとファド、初めて聴いた時は驚きでした。ファンの皆様を感じられたのと真実同じでした。魂の歌、それからは虜、幾度となくライブへと足を運びました。1990年今の伊藤忠食品が泉尾に第2棟目の配送センターの落成披露に月田さんに歌っていただきました。大勢の来会者のどなたもファドを知らない方ばかり約300名余。数日後あの歌はと問合せがありました。日経新聞の高尾さんもその頃からファンになられ、日経新聞のコラムに秀子さんの事が記事に出たり19chTVに出演されたり、時が流れ日が経ち、日本大阪ポルトガル協会が設立されました。ポルトガル修交450年の行事でニューオオタニホテルで秀子さんとぼったり逢いました。彼女の推薦でメンバーになったのだと今も思っています。それからが大変、ファド倶楽部メンバーと協会メンバーですっかりポルトガルずいしてしまいました。一度リスボン行くそしてファドハウスを巡って見たいと考えています。(つづく)

山本 健

ファドに魅せられて

修学旅行で初めて上京した折り嘘をつき単独行動で日劇ウエスタンカーニバルを見た時の 田舎青年の驚きは 想像を絶しておりました。昭和34年大学入学 安保騒動の学生運動の最中 歌声喫茶でロシア民謡に没し 其後の人生で 新宿や銀座でロックを 都内各地の店で ジャズ・ウエスタン・タンゴとさまざまな音楽に親しみました。

社会人となり 人との心のえにしに悩んで は シャンソンに逃げ 恋をしてはカンツォーネを歌い 酒場のホステスの接客に落胆すると フラメンコ音楽に足を向けたものです。

やがて 文筆家業で音楽記事を書き始めると 当然 数々の民族音楽に接することで 心をときめかせる毎日を過ごしたものです。その頃アマリア・ロドリゲスの「黒いはしけ」に出会いました。まるで心の内をさらけ 放り出し 悲しみを絞り出す その素朴な情感の訴えであるファドに 心を奪われてしまいました。

その時の感動を 今でも忘れてはおりませんが その後の私の人生は 音楽にのめり込むには 余りにも 日々の時間が少な過ぎました。

やがて TVでのカラオケ番組企画制作で 全国を飛び回り 演歌に携わるうちに 日本人の心になくはならない演歌の心と思い 滅び行く演歌にスポットを当てながら カラオケ指導と審査に 時間を費やしてしまいました。

あれから十余年 現役を引退し 当地に書齋を構えた途端のある日 偶然飛び込んだ居酒屋で ファドが流れ ビデオが写されていました。それが月田秀子氏のステージ・デモテープでした。

昔と同じ感動が 即座に思い起こされ 忘れ物を思い出した気分で 足しげく店を訪れ ついに テープのコピーを手に入れました。辞書を引き歌詞が理解できても アカベラで歌えないもどかしさを 日夜恨みながら テープに聞き入っております。

当地で月田氏の公演が 企画されているとの噂を聞き ぜひにも 実現させていただきたいとこの無信心人間が 神に祈っております。

(〇〇県〇〇市 匿名)

informação

- 十六世紀末にローマへ行った少年使節達の運命と、ECの女性文化官の見た現代の日本を対比して描いた日ポ合同制作映画「アジアの瞳」が、下記の日程で上映されます。
〈東京〉9月25日～10月7日「アテネ・フランセ」☎03-3291-4339
〈大阪〉11月15日～11月28日 大阪市西区九条「シネ・ヌーボー」☎06-582-1416
- 毎回素晴らしい月田秀子のコンサートのチラシ、ポスターをデザインして下さっている山口道夫氏の個展が大坂で開催されます。氏のもう一つの顔を覗いてみて下さい。
会期:10月27日～11月8日 会場:大阪・本町「ESPACE 446」☎06-245-0446
- 「平成古寺巡礼-天野山・金剛寺」のNHK総合テレビでの再放送がダイアナ元王妃国葬特別番組のため、放送順延になっています。今のところ、放送日は未定です。ご了承ください。
- 「日本ゆうせん放送」で、フアド特集のDJをすることになりました。
放送日:11月16日～30日 24時間 毎日放送(土曜～日曜は別プログラム) チャンネル AE-4最新DJ LIVE U-LINE(バラエティ)
- 長倉洋海さんの写真展-アマゾン&アフガニスタン- 1997年12月5日(金)～25日(木) 松明堂ギャラリー(東京都小平市 ☎0423-41-1455)

＜月田秀子のスケジュール＞

- 10月 1日(水) 大阪/西中島南方「三裕の館」 ☎06-304-1745
開演:8:00 ポルトガルギター:池側 忠, ギター:野上圭三
- 4日(土) 山梨/河口湖円形劇場 ☎0555-76-7873(久我)
- 5日(日) 山梨/八代町・加賀見牧場「ミュージックフェスタIN八代」 ☎0552-37-6236 ギター(渡辺)
- 12日(日) 大阪/箕面 みのおエフェム WEEKLY国際交流コンサート サンクスみのお2番館・国際広場
午後2時開演(FM放送による生中継)
- 16日(木) 神戸「五木寛之論楽会」 新神戸オリエンタル劇場
開演:6:30 ※希望者は10月5日までに田中真理子まで ☎0736-43-2277)
- 21日(火) 札幌「五木寛之論楽会」 かでる2.7(道民活動センター)
開演:6:30
- 23日(水) 岐阜県/恵那市「恵那文化センター集会室」 ☎0573-47-2915(繁澤)
- 25日(土) 長野県/小諸市『小諸ユースホテル』 ☎0267-23-5732
- 27日(月) 大阪/心斎橋「アートクラブ」 ☎06-253-0827
8:00～3回ステージ(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ギター:佐野健二
- 30日(木) 京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ギター:野上圭三
- 31日(金) 京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ピアノ:河村真千子
- 11月 5日(水) 大阪/西中島南方「三裕の館」 ☎06-304-1745
開演:8:00 ポルトガルギター:池側 忠, ギター:佐野健二
- 17日(月) 大阪/心斎橋「アートクラブ」 ☎06-253-0827
①8:00～3回ステージ(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ギター:佐野健二
- 27日(木) 京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ギター:野上圭三
- 28日(金) 京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ピアノ:河村真千子
- 12月 3日(水) 大阪/西中島南方「三裕の館」 ☎06-304-1745
開演:8:00 ポルトガルギター:池側 忠, ギター:野上圭三
- 11日(木) 東京/新宿「シアター・アプル」 月田秀子ファドコンサート'97
開演:7時 ※チラシ参照
- 22日(月) 名古屋:「愛知県芸術文化センター」月田秀子ファドコンサート'97
開演:7時 ※チラシ参照
- 25日(木) 京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ギター:野上圭三
- 26日(金) 京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00(入れ替えなし) ポルトガルギター:池側 忠, ピアノ:河村真千子
- 28日(日) 大阪/桜橋:「サンケイ・ホール」 月田秀子ファドコンサート'97
開演:5時 ※チラシ参照

■編集後記

黒田清会長、入院中。氏の近著「地を這うペン」に、選暦も過ぎて、自らの足で取材する旨に、一貫として反戦、反差別を信念にジャーナリストとして戦ってきた氏のやさしさの原点を見る思い。その生き方は又、「戦地の一人一人に会うことで、報道では伝えられない真実が見えてくる」というフォトジャーナリスト長倉洋海氏と重なる。追い立てられないと事は運ばない、試験間際の一夜漬けからいまだに開放されず。今年も鮎釣りに行けずじまい。鮎の一夜干しは来年までおあずけ、秋刀魚の塩焼きに手酌のビールで我慢のまた今宵。(月田)

月田秀子ファド倶楽部 ホームページ

<http://www.osk.threewebnet.or.jp/~fh/fh/tsuquida/tsuquida.htm>

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル第16号

■1997年10月 1日発行(季刊:年4回発行)

■編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局

■〒543 大阪市天王寺区味原町2-10 エヌケイビル 502号

■TEL&FAX 06-765-4808